

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

湘南医療大学

薬学部・医療薬学科

殿山 泰弘

作成日 2025 年 5 月 30 日

1. 教育の責任

私が所属している湘南医療大学・薬学部・医療薬学科は、「臨床に強い薬剤師を育てる」を目標としている。私はそこで薬学基礎科目である生物学を専門とする教員として実習センターの専任教員として学内における学生実習を安全かつ円滑に進めるために実習スケジュール作成・機器の管理に従事している。また、講義においては、科目責任者として生物系実習、担当者として生化学実習、微生物学実習、早期臨床体験実習、後期臨床体験実習、医療薬学チュートリアル演習、薬学総合プレ研究、薬局実務実習、卒業研究Ⅰ、卒業研究Ⅱ、総合演習Ⅰを担当している。薬学部では、実習を通じて、生物学・生化学の基礎知識だけでなく、自ら情報を取得して分析し結論を出す研究マインドを醸成させることが求められている。

加えて、看護学科およびリハビリテーション学科からなる保健医療学部では、科目責任者として生物学の講義を担当している。この講義においては、医学・薬学に関連する知識を理解するための生物学の基本的知識を習得させることが求められている。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

大学は、知識・理論と実社会との架け橋となる場である。理論・知識の暗記のみに執心することなく、それらが実社会でどのように応用されているかを理解しなければ、実学である薬学の教育は完結しないと考えている。その際、知識・理論が社会をどのように変化させたのかを歴史の観点から見直すことも重要であろう。そして、習得した知識や理論を活かして、臨床現場での問題を解決する能力を身につけさせることが重要である。科目を問わず、全ての知識は有機的につながっていることから、教養科目も含めて幅広い知識の習得に努めることが重要である。そのうえで、自らが感じた疑問を自身で文献を調査し、仮説を立てて、実験や行動により検証の科学的手法により問題を解決する能力を持つべきである。薬剤師の社会における活躍の場は広がりつつあり、それに見合った知識や技術をさらに身につける必要がある。これからの薬剤師は、疾患に関する知識を有し、処方提案ができなければならない。そのため、薬剤師をはじめとする医療人は、生涯を通じて勉強する方法論や習慣を身につける必要がある。

近年はインターネットや SNS で簡単に文献や知識が手に入る。大学教育は、知識を得ることよりもそれをどのように使うかに重点を置く必要がある。大学でしか学べないことの一つに他者との相互作用を通じて知識や理論を活用することがある。この活動は、臨床現場で、患者だけでなく多職種との連携にもつながる。この状況下において、能動的学修態度を育てること、学生との信頼関係を築いて学修意欲を高く維持することが教員の役割であると考えている。また、学修方法については、記憶への定着のための反復学修と学修習慣を身につけさせることを重視している。

2) 理念をもつに至った背景

大学において、知識・理論と実社会との関係を教えることを重要視するのは、私自身がこれまで歴史に興味をもってきたからである。自身の学生生活での学修を通して、科目を問わず全ての知識は有機的につながっていることを実感したことも関係している。たとえどんなに時代が進もうとも人間の本質は変わらない。故に歴史を理解して世界を俯瞰的にとらえることは、将来、社会がどのような方向に進むのかを考える上で重要である。これを考えることにより、どのように小規模なものであれ、将来にわたり社会で自身が果たすべき役割について考えることになるからである。

医療現場において薬剤師という職業は、医師や看護師に比べて患者と接する機会が少なく、極めて地味な存在である。過去には、薬を袋に詰めるだけと揶揄され、6年制度になっても未だに薬剤師不要論が囁かれて続けている。そのような状況下において、文科省は、対物から対人へのスローガンを掲げて新しい薬剤師像と教育方針を打ち出した。調剤業務の一部を補助者に委任し、薬剤師が患者への対応に重点を置くことによって、地域住民の健康と福祉を一手に引き受けるようになる。この変化により患者だけでなく、医師・看護師・理学療法士・作業療法士・ケアマネジャーなどの多職種とも関わることになり、高いコミュニケーション能力も必要となる。様々な背景を持つ人々に対して、自身の高い専門的知識を伝えつつ、協調して患者の抱える個々の問題に対処しなければならない。この薬剤師の職能拡大は、自身の薬局での勤務経験を通じて強く望んできたものであり、その実現に向けた教育方法の転換の必要性を感じているからである。

また、近年、インターネットや SNS によって学生が知識を容易に得ることができるようになり、学生が調べてきた内容が私の知識を凌駕することもある。アカデミズムとは、新しい知識を他者と共有する活動とそれを実践する態度である。故に、現在、彼等の知識の多寡に関わらず、前提となる知識を学生と共有した上で、より公正に深い議論を展開することが可能となったといえる。そのような考えのもと、私は、今後は従来のように教員が一方的に知識を伝えるのではなく、対話を通してそれらの知識の活用方法を教えることにもっと重点が置かれるべきであると実感している。また、自身の学修方法やチューター活動での苦い経験から、学修にとって動機付け、学修環境の整備、反復学修を促すことが重要であり、そのためには学生と信頼関係を築くことが必要不可欠であることを実感している。

3. 教育の方法・戦略

講義構成の工夫

講義や実習の構成方法を作成する上でストーリー性を重視して構成している。トピックを3つに限定する。確認問題を入れる。初回の講義でアンケートを実施して、高校での履修状況や現時点での知識のレベルを確認する。次回の講義で小テストを実施して知識の定着を把握する。小テストに自由記述欄を入れて講義に対する要望を記載させる。毎回の講義について要望を都度聞き取り、学生にフィードバックすることにより、学生との信頼関係の構築や迅速な授業改善につなげている。知識・理論と共に実社会における応用例と社会への影響を紹介することを徹底する。講義においては、効果的な導入、まとめ、前後の講義内容との関係を明確化するなどの工夫をしている。

少人数からなる対話形式による学修の場を作る【チューター活動の充実】

現在、2名のチューター教員で6名の3年生を担当している。1年次から生物学の勉強会を開いて一緒に学修する機会を作ってきた。その際、科目担当者と協力しつつ、講義で分からなかった点について解説をし、学修した知識・理論の社会への応用例など学生が興味を引きそうな話題を取り上げて対話を行った。また、欠単位の多い学生については、定期試験前に自習室で一緒に自習するなど学修支援を行うようにしている。その際、マラソンの伴走者のように学生と並び自身も作業をすることで真剣に学修する雰囲気づくりを心掛けている。

新しい実習教材の開発

より高い教育効果が得られる実習課題や材料の調査や開発を行っている。日本薬学教育学会の要旨から抜粋する。

4. 学習成果

保健医療学部 生物学

毎回の講義資料に10問程度の問題を記載しておき、復習のための課題として学生に問題を解くように伝えていた。そして、次回の講義の際に復習問題の類題を含めた小テストを実施していた。この小テスト実施については広い講義範囲の中から学生にポイントを伝える上でとても役に立ったと考えている。本科目は複数の教員によるオムニバス形式をとっているが、自分の担当のところだけでなく、全ての回での小テスト実施を提案する。

講義ごとの小テスト実施については、「範囲が広いから小テストをしてくれた方がどこが重要かわかる！」など好評であった。講義で伝えきれなかった補足なども解説の際に話せるので、今後も継続する。

薬学部 生物系実習(評定点:75.19)

授業評価アンケートの自由記述では以下のコメントがあり、一定の評価を得ている。

- ✓ 授業の雰囲気がとても良かった
- ✓ 質問やチェックを受けるときにアドバイスや特徴をたくさん話してくれた事です。細胞に対して理解が深まりました。
- ✓ 説明内容は分かりやすいところが多く実習を スムーズに進めることができました。

5. 改善のための努力

授業評価アンケートに基づいた講義・実習の改善

講義最終日の授業アンケートに加えて、小テストに講義についての要望を学生が記載できるよう自由記述欄を設けて、毎講義ごとに学生からの要望を聞き取っている。これらの学生からのコメントを真摯に受け止め、講義資料や板書などの分かりにくい部分を適宜修正している。また、実習の操作説明は、動画を多用するなどして実際の操作の理解を促している。

講義・実習へのアクティブラーニング導入

未だ実践には至っていないが、現在、保健医療学部の生物学の講義においてアクティブラーニングの手法を導入することを試みている。従来の知識を網羅する講義では、試験の点数があがらない。これは、教える項目が多すぎるため、学生が消化不良を起こしていることが考えられる。そのため、講義形式の回数を減らして、3 回に 1 回をアクティブラーニングの回とすることを計画している。即ち、全 15 回の講義を 5 つの章(3 コマ/章)に分けて、3 回のうち、2 回を講義形式、1 回をアクティブラーニング形式とする。学生を 2-4 人のグループに分けて、課題について調査および意見交換させ、まとまった意見を発表させる。教員は、それらの意見を分類・整理してフィードバックする。最後に教員から正解を解説して、講義を終える。アクティブラーニングの課題は、講義形式で取り上げた具体的な知識・理論が社会に与えた影響に関するものとする。

6. 今後の目標

短期目標

1.講義・実習へのアクティブラーニングの実践と改善(2025 年度前期)

講義形式で伝える重要項目を厳選して絞ることでアクティブラーニングのための講義時間を確保して、対話形式の講義を実践しつつ、内容を改善していく。

2.新しい実習教材を用いた実習の実践(2024 年度後期)

メダカを教材として薬学教育に適した実習内容を新たに作成し、生物系実習で実践する。

長期目標

講義・実習およびチューターによる学修支援を通して蓄積された成績データを様々な観点から統計学的に解析することで、自身の試みの教育効果を評価する。さらに、その結果に基づいて自身の講義・実習を改善し、より効果的な講義スタイルの確立を目指したい。

【添付資料】

1. 湘南医療大学 2025 年度シラバス
2. 第8回日本薬学教育学会 発表要旨
3. 保健医療学部 生物学 授業評価アンケート
4. 生物系実習 授業評価アンケート